

## 31 命の値段

星野博美

野暮用でまとまった金額が必要になり、父がATMへ行った。ところがキャッシュカードには一日の引き出し限度額があり、予定していた金額が引き出せなかった。

「自分の口座から金を下ろすだけなのに、なんで好きにできないんだ。明日も行かなきゃならないじゃないか」と愚痴たらたらである。

日本のATMに対しては、私も言いたいことが山ほどある。いまはコ

ンビニで下ろせるようになってだいぶ利便性は上がったが（それでも対象ATMを注意深く選ばないと手数料が生じる）、かつては金を下ろすためだけに駅や繁華街まで行かなければならず、しかもぼやぼやしているとすぐ時間外になって手数料を取られた。

それにひきかえ、香港は便利だった。ATMはいたるところにあり、各金融機関が相互提携しているため、銀行を選ばずに引き出すことが可能。しかも二十四時間対応で、手数料はかからない。国際金融都市とはこういうものだろう。帰国後しばらくは、日本の銀行システムが不便で仕方なかった。特に三鷹駅から徒歩三十分のところに住んでいた時は辛かった。もう適応したけれど。

しかし年寄りと暮らす時間が長くなるにつれ、かつて抱いていた不満

は肯定的な感情へと転じた。一日に多くの金額を引き出せない、それはオレオレ詐欺などの犯罪行為から年寄りを守る有効な対策になる。限度額が厳しいことは、確実に犯罪の抑止力になる。明日また行けばいいだけの話ではないか、どうせ時間はあるのだし、ATMは近所にあるのだし、と父を慰めた（と言うより、たしなめた）。しかし半日たち、父が再びぐずぐず文句を言い始めたので、あの話をするしかないと思った。

あの話を聞けば、父も考えを改めるだろう。

知り合って二十一年になる香港の親友夫妻は、毎年日本へ遊びに来て、わが家に泊まる。私が中央線沿線の風呂なしアパートに住んでいた頃からの年中行事のようなもので、一緒に銭湯へ行ったり、川の字になって

寝そべり、夜明けまで喋り続けるのが常だった。

私たちは、まだ互いに知り合っていなかった九〇年代前半、三人とも同時期に西荻窪界隈に暮らしていた。彼らにとって私のアパートは、なつかしい東京の青春を思い出させてくれる記憶起動装置でもあったのだ。

ある年の冬、いつものように彼らが泊まりに来た。ところが日本で六年ほど留学経験のある夫が、大学の恩師との懇親会に出かけたきり、一向に戻ってこない。妻は次第にそわそわし始め、何度も夫の携帯に電話を入れた。しかし飲み会が盛り上がっているらしく、留守番電話に気づかない。十一時を回ってようやく夫が戻ってきた時、妻の怒りが爆発した。

「どうして電話をくれないのよ？ 心配するじゃない！」

そんな彼女の動転する姿を見るのは初めてだった。ふだんは穏やかな彼女の憤りに私はびっくりして、「まあまあまあ」と仲裁に入った。このあたりの地理には詳しいのだし、日本語はペラペラだし、何も心配はない。こうして無事に帰って来たのだから、よしとしようではないか。

「心配させた僕が悪い。これからはちゃんと電話する」と平謝りの夫。  
「ちょっと連絡がつかないと、彼女、すごい心配するんだ」

「何年たっても仲のよろしいことで」と私がひやかすと、「そうじゃないの」と、彼女が何かを思い出して涙目になっている。

「何かあったの？」と尋ねると、彼がようやくやく白状した。

「この間、拉致されたんだよ」

その頃彼は、日本のとあるメーカーの香港事務所で働いていた。工場は広東省の東莞とんぐんにあり、週に一度は日帰り出張をする。ふだんは工場から香港へ直帰するのだが、その日は地元の工場関係者の接待があり、深圳に寄らなければならなかった。飲み会がお開きになり、彼は店を出た。深圳駅はすぐ見えるところにある。タクシーに乗るほどの距離でもない、一人で駅に向かって歩き始めた。

当時香港人の間で、夜に深圳を一人で歩いてはいけない、と言われていた。どれほど賑やかな場所であっても、深圳では何が起きるかわからない。そしてトラブルが起きた時、香港の警察は手出しができない。

しかし香港と深圳のあまりの距離の近さが、そこが異文化の支配する異国(すでに返還されたから、厳密には異国ではなく同国なのだが)であ

る警戒心を薄れさせる。彼にしても、そこから徒歩で香港側に渡り、羅湖で電車に乗れば二駅で自宅に着くのだから、異国意識を維持するのは難しかった。

そこに見えている深圳駅へ、彼はたどり着くことができなかつた。

「いきなり目の前に数人の男が現れて、車の中に押しこまれた。一瞬の出来事だつた」

彼が連れて行かれたのは、倉庫のようなただつ広い場所だつた。

「僕みたいな香港人がたくさん捕まっていたよ」

そして犯行グループにキャッシュカードを出させられ、暗証番号を言えと強要されたのだ。

「でも深圳じゃ下ろせないのでは？」

「深圳は香港とまったく同じ。香港のキャッシュカードで二十四時間、好きなだけ下ろせる。元はといえば、香港人が便利に動けるように、そうなったんだ」

彼は周囲を見回した。腕を折られて泣いている人がいた。腕と足を折られている人もいた。彼は妙に冷静だった。半日言わなければ腕一本、もう半日言わないと追加で腕か足をもう一本、というように量刑が決まっているようだった。そしてあまり長時間言わないと、よほど口座に多額が入っているとかわれ、身代金要求に発展する危険性もある、と彼は考えたのだ。

妻と共働きして必死に貯めたお金だ。もちろん暗証番号は言いたくない。しかし不幸中の幸いと言うべきか、その日はキャッシュカードを



一枚しか持っていなかった。この口座から全額下ろされたとしても、まだ香港には他の口座がある。一文なしになるわけではない。

彼は腹をくくった。

「この金で自分の命を買うんだ」

そして体のどこかを傷つけられる前に、暗証番号を白状することに決めた。

二時間ほどたった頃だろうか、彼は別室に移された。犯行グループの態度が急に親切になり、朝食をふるまわれた。そして明け方、車に乗せられて辺鄙な国境検問所前まで運ばれ、そこで解放された。

「またいつでも深圳へ、って言われたよ！」

歩いて国境を渡り、香港内に入った時、真っ先に向かったのはATM

である。残額はゼロ。何度見直しても、ゼロが一つ印字されているだけ。そこで妻に電話をかけた。半日連絡の取れなかった妻は、心配して泣いていた。

その足で警察に駆けこむと、「ああ、あなたもですか」という顔をされた。明け方にこうして駆けこんでくる香港人が、あとをたたないのだという。一応被害届は出したものの、深圳で起きた事件に香港の警察は関与できない旨を伝えられた。要は泣き寝入りである。

「で、いくら盗られたの？」

「二十万香港ドルくらいかな」

二十万……日本円にして三百万円ではないか！ その額の多さに私は卒倒しそうになったが、修羅場を経験して体は無傷で生還した彼は、冷

静だった。

「いい線だったと思う。残高があまりに少なかったらケガしていたかもしれないし、もっと多かったら立ち直れなかった。三百万は、ちょうどよかったんだよ」

極度の自由と利便性の高さには、リスクがつきものだ。しかも香港のように、多くの人々が始終境界線を行き来する場所では、特に。それからというものは、キャッシュカードを持ち歩かなくなった。もともと深圳は好きな街ではなかったが、話の印象が強烈すぎて行く気になれない。

そして三百万円という数字が頭からこびりついて離れない。

命の値段は三百万円。つつい、そんな気がしてしまふのだ。

この話をしたら父は、引き出し限度額について文句を言わなくなった。